

桜蔭俳話会 一月句会(第三〇二回) 桜蔭会館

平成二十四年一月二十二日(日)

互選結果と鑑賞

2点①歯科医師の靴擦る音や寒の入 秀一

【秀句鑑賞】

人間の記憶の喚起は、それが初めて刻まれたときに受けた身体的ないし心理的情報によって誘導されるところが大きい。今は治療技術も進歩し、治療中に受ける苦痛は大分緩和されているようであるが、幼少時に治療椅子に縛り付けられるようにして受けた痛さの記憶は、思い出したくもない。歯医者など二度と行きたくもない。しかし現実には、不注意により再発した虫歯治療や経年変化による入れ歯の調製のために、歯医者に向かいざるを得ない。

待合室で順番を待つ間に漏れ聞こえるドリルの音に作者の嫌な記憶は蘇りつつある。治療椅子に腰掛け、仰向けに寝かされ、観念するように目を閉じた作者の耳は、作者にとつて殆ど唯一の情報器官となる。その耳には、治療用機材の無機質な音共に、歯科医師の靴音が底奏通音として入って来る。この靴音はこつこつと床を快活に踏む音ではなく、床を摺る音であった。

作者が歯科治療を嫌なものと最初に記憶に刻んだときの情報は、歯科医がものに疲れたように靴で床を摺る音であった。歯科治療と寒の入との取り合わせは、不安感を共通項として効いている。

①寒晴の木椅子に一人無人駅 幸

【秀句鑑賞】

寒晴の静謐で身のしまるような空気の中を一人、駅の木椅子に身を預けている。その木椅子は何世代にも渡ってその駅を行き交った人たちが、それぞれの暮らしや人生を抱えて座り、話し込んだかも知れない。往時に比べて地域社会は沈滞し、廃線こそ免れているが、駅は何時からか常勤者のいない無人駅になっている。

「無人駅」や「廃線」は所謂俳句らしさを醸すために多用され勝ちであるが、掲句では、上五の寒晴と取り合わせられることによって、この常套感が減殺されている。

目標は目標のまま去年今年 友子

もてなしの合間にのぞく初鏡 友子

【秀句鑑賞】

大晦日から元日にかけて忙しい時間を過ごした主婦。元日こそはゆっくり過ごそうと思った矢先、玄関には早くも年始客。いつも身奇麗にしているので、鏡台の前にじっくり座って化粧を整える必要はないのかも知れない。そうは言ってもそこは女心。もてなしの料理を出し入れする短い時間の合間に鏡でチェックしたのであるか。この「初鏡」は男性には作句も鑑賞も難しい季語である。

鍬形の残る土くれ寒早 ヤエ子

「秀句鑑賞」

冬野菜を掘りこした後の土の団塊であろうか、土くれの上面や側面に鋏の歯形がありありと残っていたのである。雨に崩れることもなく鋏形は原型をとどめ、あたり一体が農地であることの証となっている。しかし、極限まで乾燥した土くれば表面の土粒を少しづつ風に飛ばされ、鋏形は風化寸前である。人智の及ばない自然の営みは。人間がやっと開拓した農地を易々と荒地に戻してしまうのであろうか。

1点①窓広く並木の見えて春近し

真三

【秀句鑑賞】

室内に居る作者の前の大窓には、大通りの並木が遠近画法で描かれたように全景が迫って見える。近くで見上げれば、並木の一本ずつは、そこかしこに【冬木の芽】をつけ、春を待っているであろう。窓に映える並木から「春近し」を作者は感じ取ったのである。

①初雪や思ひがけなき文の来る

秀一

【秀句鑑賞】

初雪は大雪とならず終わることが多い。列島の太平洋側では、晴天続きのある日突然、気団の配置がたまさか変わって降雪予報が出ることがある。そのような思いがけない初雪に見舞われた日、思いがけない人からの手紙を受け取った。その内容は思いがけないことかも知れず、覗い知れないところである。自然世界と人間世界は切り離されているようでいて互いに連関があり、予測し得ない偶然の力によって共に動かされているかも知れない。

風邪引いてゐる暇はなし夜の介護

守

寒晴やしろがねきさら相模灘

ヤエ子

三ヶ日後向く事捨ててけり

溪水

男たち犬に気合や初の狩

幸

クレーン車の厳めしき鼻注連飾

貞勝

【秀句鑑賞】

工事や作業の安全祈願のためにクレーン車両の先端部に注連飾を掛けたのである。この先端部の具体名称を言わずに、「厳しき鼻」と集約したところが巧い。

人体で言えば「鼻」は顔の前面に突出しており、人体前方の異物の存在を当該異物が発する匂いを嗅ぎ取ることによつていち早く知り、安全か危険かを判断するものである。危険な現場で作業するクレーン車においても、このような「鼻」的存在は重要である。

幾たびも齢聞く通夜の寒さかな

秀一

【秀句鑑賞】

この問いかけの「齢」は亡くなった人の齢ではなく、参列者が互いに聞き合っている齢であろう。齢を重ね

るのに連れて、通夜の焼香待ちの時間や精進落しの席に交わされる会話には、この「齡」が呪文のように繰り返される。通夜の寒さが心底から身にしみる。

朗読の声の震へや初稽古 友子
山国の風は直球寒九かな 貞勝
節分や身のうちの鬼匿しおく 秀一
冴える月撞く復興の一打かな 幸
駅伝の坂歓声の二日かな 貞勝

初空や恙なき身の深呼吸 溪水

【秀句鑑賞】

昨年の東日本大震災の惨状の記憶がありありと残り、数年以内に七〇パーセントの確率で首都直下型地震や一連の連動型地震が予想されていることを踏まえると、今生きていること、生かされているこの身が恙ないこととの有り難さがひしひしと感じられる。初空のもとで深呼吸できること幸運に身を引き締めて。

※年賀状老老介護の添書きが 溪水
初雪の斜めに降りて身にきびし 真三
師の遺作春着をつけた市松人形 幸
為すことの八方ふさがり冬ざるる ヤエ子
何もかも引き算の年逝きにけり 守
飛行機が鯨にかはる冬の雲 秀一
吹雪く夜の海はブラックホールかな 守
歩の進むみなとみらいの冬の街 真三
風花や赤い靴の子貧しき子 貞勝
福寿草卒寿を超えて早や四年 溪水
冬ギヤラリー良き絵並べど人すくな 真三
日輪の凍てし原爆資料館 守
ベランダに葱植えてありプランター 溪水
元日の地震一瞬の悪夢かな 守
健康の欄切り抜きぬ冬籠 友子
迫力の書初の展見あるきぬ 真三
慈雨待てる葉物畑よ七日粥 友子
寒卵鳥獣戯画の茶わんかな 幸
去年今年天変地異の絶ゆるなく 貞勝

(不在投句 野上貞勝・瀬戸溪水・稲葉幸・岩野ヤエ子)

(事務局より)

第一〇四回 通信句会を実施します。

句数は、冬又は春に属する季語を用いた三句です。同封の葉書で、二月十日までにお送りください。